

1、収束宣言はしたものの、別紙の通りトラブルが続き、収束と程遠い現実がある。中心は汚染水の漏洩だ。依然として「閉じ込める」ができず、「冷やす」も薄氷を踏む状態。

住民は不安におののき、被告への不信を募らせている。別紙は、被告の原発事業者としての資質や管理能力の欠如を示しているが、本書面で指摘するトラブルや調査妨害はその最たるものである。

2、停電による使用済み燃料プール冷却の停止

本年3月18日、停電でプール冷却を含む9つの装置が丸一日停止。プールに大量の使用済み燃料が保管中。事故の時の4号機プールの悪夢がよみがえる。（米80キロ以内からの脱出呼びかけ、東京が危険）停電が後2日続くと大惨事。

情報開示も不十分。原因はネズミが配電盤に侵入ショート。初歩的で考えられないミス。その後も2度停電で停止。

3、汚染水の漏洩

本年4月5日、7つの地下貯水槽のうち2号で漏洩。さらに3号も漏洩。移送先の1号も漏洩。移送配管の継目からも漏洩。7つの貯水槽のうち使用中は3つ。それがすべて欠陥。漏洩の総量は120トンというが600トン説もある。実体は不明。事故後最大の漏洩。原子炉建屋地下に放射能汚染水が貯まり、ここに1日当たり400トンの地下水が流入し、汚染水が増大している。地下貯水槽は汚染水保管の切り札で、縦60米、横53米、深さ6米、止水シートを3重に張り、産廃最終処分場の仕様をまねた。安価な工事、設計上、施工上の欠陥が指摘されているが、原因はいまだ不明。地下水の流入経路もいまだ不明。被告の場当たりの対応が生み出した結果だ。汚染水保管計画は全面見直し、今後も綱渡りが続く。被告は最終的に汚染水の海への放出を計画しているようだが、それは許されない。

I A E Aは「汚染水問題が当面の最大課題」と危機感を募らせている。

4、被告の自白と二枚舌的体質

被告は事故が人災であることを否認するようであるが、本年3月29日公表の被告原子力部門改革の最終報告書では、以下の通り事故に対する自らの過ちを認めている。

「設計段階から地震や津波を起因とする故障への配慮が足りず……、運転開始後も海外の安全強化策や運転経験の情報を収集・分析する努力が足りず、事故への備えが設備面でも、人的面でも不十分だった。その結果、炉心熔融し、広域に大量の放射性物質を放出させる深刻な事故を引き起こしたことを反省する」「深層防護の備えを行う姿勢が足りなかった」「まずは原子力部門から体質改善を促す」等々。

これは事故発生に対する自らの過ちを認める被告の自白だ。しかし事故後も続くトラブルや調査妨害などを見ると、最終報告書で言っていることと、現実に行っていることはまるで違う。被告の安全軽視と隠蔽の体質は変わっていない。こうした不誠実な二枚舌的体質を改めない限り、どんなに本件原発での安全対策強化を言っても、誰も信用しない。被告に原発を運転・管理する資質・能力はない。